

第三十八回中央教化研究会議

平成十七年九月七日（水）・八日（木）

基調報告 「日蓮宗の教化学を考える」 ― 教団の歴史から学ぶ平和と戦争 ―

（日蓮宗現代宗教研究所主任） 伊藤 立 教

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

基調報告をさせていただきます、現宗研主任伊藤立教でございます。よろしくお願い致します。前もって会議資料一組を配りましたけども、今日また新たに、当日の資料として二つ配りました。体調が悪くて言葉が駄目なので、目でもってご確認をと思っておりますので、ご理解いただきますようお願いいたします。

今ごらんいただきました映像は、満州から始まって満州撤退で終わりました。十五年戦争、これが世間の見方です。我々は戦争というと、或いは戦時中というと、太平洋戦争、昭和十六年から思うようなんですが、特に、各寺院のご回向についても、太平洋戦争、なんてこうやっちゃいますけれども、世間は満州事変の昭和六年から見えております。これが、世間の見方です。我々もそこに着目していかなければ、世間の目から離れてしまいます。

前もっての資料、二頁でしたか、年表が入れてありますけれども、年表の項目の抜粋を六頁に入れてありますが、アンダーラインが引いてあります。このアンダーラインの間が、満州事変から終戦までの、いわゆる十五年戦争になります。これを私は戦時中だと思っております。でもその戦時中になる前、満州事変になる前に明治からの流れが

ずっとあつて、そして、終戦から今日までの流れがあります。歴史の中で、ものを見ておいていただきたいと思っております。

五頁をご覧ください。基調報告の第一頁目にお曼荼羅が載っておりますが、まあ、正確な曼荼羅ではなくて、お題目の足元に、天照・八幡が祀られておるところを、特高資料が注目して載せております。我が宗は、我が宗の本尊が不敬であるということをお憲から言われたわけでございますが、その元を作ったのが、本宗の中の教師、という問題を今から明らかにしていきます。それについて、曼荼羅不敬・御遺文削除事件が起こります前の背景が、下のほうにあります清水龍山先生の『偽日蓮義眞日蓮義』の引用であります。もう既に大正時代、大正五年ですが、天皇本尊論の問題が起こってきているということを歴史の中で見ておきたいと思っております。持ち時間一時間しかない中を、二十七分もかけて映像をお見せしたのは、戦争を知らない世代が多いと聞いているからです。だいたいこの問題を去年提起しました時にも、今頃戦争のことをやってもしょうがないと言う方がいらつしゃいましたけれど、世間は去年の暮れから、十五年戦争、或いは、戦後六十年の問題をずっと、特集して扱っております。これがあの戦争を考える最後の機会だと思っておりますので、私もそういう認識で、皆さんが自分の目で、自分の頭で考えていただくための材料を基調報告として提供したいと思っております。

今日配った資料の、配付資料二のほうをご覧ください。A4一枚のほうでお願い致します。訂正が二つありますので、後でお願いします。特に重点としましては、日本精神と天皇本尊という二つの項目を挙げておきたいと思っております。明治から百五十年余の歴史を追ってみて思ったのは、明治維新の始めから、日本精神、日本が特別な国である、ということでもって国をまとめていった背景があるように思います。それが、善悪は別にして、ずーっと日本を、終戦まで縛っていた、或いは戦後もその影響があるという風に、研究的に考えております。

では基調報告当日資料二頁、三の重点項目のうち、日本精神について書いた所を読ませさせていただきます。二項目申

し上げますが、日本精神運動は日本の最優秀性を鼓吹する精神運動として、満州事変の頃に流行したと。これは、曹洞宗の工藤英勝先生が研究したものです。日本仏教が余りにも時流に迎合したということも踏まえて、我が宗のほうの資料としましては、①にあげた「日蓮宗教報」の、日本精神に立ち返れ、というところですね、これが、この分厚いほうの資料の七十四頁に載っております。引用しておきました。これは、「日蓮宗教報」といつて、今で言う「宗報」のことです。日蓮宗の公式な出版物で、日蓮宗の見解・姿勢が謳われておる。その論文ですが、我が日本国民は悠久三千年建国以来一貫して日本精神というものが存在しておつて、と書き出して、忠君愛国、国体明徴、国民精神総動員、万世一系の天皇、国体の本義、等々、言葉がずっと並んでおりますが、八紘一宇も入っておりますけれども、こういう、政府が或いは政治のほうが使つた言葉をそのまま使っている、使わされている、或いは進んで協力していったという点を読んでいただきたいと思ひます。最後に、我ら日本国民はこの誤れる個人主義・自由主義・功利主義・有利主義を一切放擲して日本本来の精神に立ち返り、とあるところが、日本の独自性を排他的に強調するという日本精神運動の問題点。それを受けまして、同じ工藤先生の研究は、近代日本仏教思想のファシズム傾向、更には戦時教学や皇道仏教の契機や過程に関わる科学的解明の必要を感じさせると。近代の日本仏教は、若干の例外を除けば、総じて体制側や支配者側に立つてきたと。この近代仏教の一種保守的な体質が、最終的に仏教全体を皇道に帰一させる皇道仏教に徹底するには、それなりの思想的な契機と過程があつたはずで、その重要な契機が昭和六年の満州事変以降の日本精神運動にあるとの仮説を設定し、解明したいと。衛藤というのは衛藤即応という曹洞宗の宗学者で、日本精神運動に対して反対をした立場の方です。その方でも、当初は、仏教を本、内とし、日本精神を迹、外とする本地垂迹論に立つておつたんですが、僅かな間に、考え方が変わつてしまふ。大きな圧力の前にですね、日本精神が主になって、仏教が従になるという風になつていくという研究をしております。こういう力が、政治的な圧力、社会全般の圧力としてあるわけですから、何故戦争に反対しなかつたかという言葉に対しては、少し考えていた

だきたい。反対できなかったということも、一面で言えるのではないかと思えます。評価は皆さんがなさっていたらしくことにしまして、背景として、一つ材料を提供しました。この「日蓮宗教報」で謳っているものがずっと、後に影響していきます。或いは、以前からの流れ、国、国家権力に対する迎合の姿勢があるという分析を、工藤先生がされていることをご紹介します。私も、そう思います。

大きな二番、当日配布資料の五頁、重点項目の皇道仏教につきましての資料が一つ、天皇本尊ですけれども、これは、五頁の十六行目をご覧ください。引用は、清水梁山さんの『日本の国体と日蓮聖人』という、明治四十四年発行の本ですが、この本の抜粋をしています。内容は、①本尊は日本国の天皇であると。それは、事前配布の分厚い資料のほうの一六頁をご覧ください。ここに、その論を受けて、「皇道一元と思想戦」という、高佐貫長さん、当時、日蓮宗宗務院の主事、課長待遇だったと思いますが、内局側にいる方の論文として載っております。全文がもう、注目すべき内容ですので、抜粋をしませんでした。実際の一一六頁をご覧ください。この一一六頁から一一七頁にかけてですね、特に一一七頁の最後の段、王仏冥合の実現。一番最後の行に、日蓮大聖人の王仏冥合がこの先決問題の解決に依って自ら成就するだろうと締め括ってありますように、皇道仏教という言葉を使い換えれば王仏冥合という考え方がストレートに入ってきているということ、この時代にこういう論文があったということをご紹介します。戻りまして、②のほうですが、同じ清水梁山さんの本の中から、「本尊の正体は即ち日本国の天皇（すめらみこと）にてましますなり」、これがあります。これについて、噛み合わせる資料としましては、分厚いほうの資料の四十二頁、酒井日慎管長がですね、勅額拝戴聖旨奉答の式典の中で、奉答文を読みますが、その中に、「本地久遠実成三身即一天照皇如来、この国の中尊として」という言葉が出てきております。このことを捉えまして、その下にあります、二六八頁の内務省警保局、特高資料ですが、その中の「皇道仏教行道会をめぐる日蓮宗内紛状況」の中に、皇道仏教行道会側が、敵対した四大本山・宗義擁護連盟の頭目である酒井日慎さんに対して、「酒井日慎師こそ

は天皇本尊論を宗門で創唱した人ではないか」と言っております。厳しい反論です。管長として、昭和七年、天皇本尊を公式に謳っておる、それを、管長を退いて本門寺の貫首になつてから、思想的に対立することになつた皇道仏教行道会に対して批判したから、行道会のほうの反応としてこういう言葉が出てくるわけですね。よく考えてものを言わないと、安易にものをやるといふなるという恐い例だと思ひますけれども、この辺の細かい経過は、資料のほうでご理解いただきます。こういう流れの中で何が出てきたかといふと、さっきの、この特高資料にお曼荼羅が載っておりますが、天照八幡のところに紙を貼る、我が寺の本堂の、本尊の、お題目の足元の天照八幡に紙を貼って見えなくする、これをやつたわけですね。もう一つは、田澤所長がお持ちでしたので借りましたけれども、これ『日蓮聖人遺文全集講義』第二十二巻。この塗りつぶしたところが、ご遺文削除です。現宗研には、資料がありません。おそらく終戦時に、宗門の恥ですから、処分したんだと思うんです。これはかろうじて手に入ったものですが、ご遺文講義でさえこうやつて削られた。当時出した霊長閣版ご遺文は、絶版にされております。昭和四十三年に復刻するまで、出されておられません。むしろ問題は、霊長閣版の縮刷遺文より後に出た、浅井要麟先生の昭和新修のほうが原文を読み下しにしてある。分かりにくかつたご遺文が分かりやすくなつた途端に、ばーつと世間から批判が出る。どういう形の批判がきたかは、分科会のほうやら資料を見ていただきたいと思います。安易に事なかれをやつておると、こういう羽目になるということを見ていただきたいと思います。遺文の削除や曼荼羅についての指示があつたと思ひますが、宗会の決議までは載っておりますが、実際の文章は分かりません。浄土真宗本願寺派（西本願寺）のほうは、宗門でもつて、戦時中のご消息は用いないという、戦時中に出した宗令についての無効宣言をしております。これでやつと戦争が終わつた、ということになります。我が宗は、これがまだないと思ひます。ここまでやらないと、戦前の総括ができない。総括ということは、頭から懺悔や反省ということではなくて、どう捉えるかを、皆さんが、そして皆さんの所属するこの日蓮宗という教団が、考えるべき問題だと思ひます。本願寺派がこういう冊子を出しました

のは、二〇〇〇年ですから、もう五年も前ですが、『写真に見る戦争と私達の教団―平和の願い』という、ここに、終戦五十年に、戦時戦没者追悼法要をやった写真が載っております。慰霊という言葉を使っております。まだ本宗は使っておりますけれども、慰霊という言葉が非常に、仏教的ではない、真宗的ではない、ということ、追悼という言葉に替えてあります。この慰霊という言葉は戦前から使っておることについての見直しも、戦後五十年に真宗はやっております。我が宗も、終戦五十年に沖繩で法要をしましたけれども、この辺の宗門としての総括はまだやっておらなかったと思います。当時、中濃教篤元現宗研所長が提案したのですが、実現しませんでした。こういう形で戦時の総括が提案できることは、中濃教篤・石川教張両師の願っておったことだと思いますので、万感の思いで、ここで資料を提供しております。本年二月の教団論研究セミナーで配った資料集、今日配った資料集、これをなんとかご自分の目で見えていただきたいと思つて、作りました。ご自分がどう考えるか、この後のパネルディスカッションを聞いていただきまして、そして分科会で是非ご自分の言葉で喋っていただいて、明日の全体会議で、何らかの、皆さんのお気持ちの表明があったらありがたいなと思つております。言葉が駄目なものですから、かいつまんで申し上げましたけれども、戦争が分からないとか、今頃戦争のことを言つてもしょうがないというのは、恥ずかしいことだと思ふんです。世間は、そこを今、去年の暮れからずーつとやってるわけですから。その辺のこと、坊さんとしてどう考えますかと言われた時のお答えの参考にとというのが、研究資料としてもこれが役立つものと考えております。

ではもう一度、この、今日配りました六ページのほうの資料の年表の抜粋の所を見ていただきますと思います。神仏分離令から始まつて、二頁の頭のほうの終戦降伏から、平和祈願大国禱会まで載せておりますが、前もつて配った資料の中に、項目だけ挙げておりましたので、項目のそれぞれについて、例えば神仏分離令が明治元年、年表の十二頁、これは前もつて配った資料の十二頁です、という風に使つていただきたいと思ひます。明治政府は、のつけから神道国教政策です。祭政一致、神道によつて国を治める。仏教も他の宗教も従属する形であるという大前提でやつて

おりますから、否応なしに始まった明治時代がですね、終戦を迎えるまではある意味、底流に、日本こそが神道のいう素晴らしい国で万世一系の国であるということを言われてきた、ある意味仕方がない面があるかも知れませんが、いったんそれを終戦、昭和二十年に清算しているわけです。この清算が、二頁の項目にあります。まず、進駐軍、連合司令部がやったことは、財閥の解体、神道指令、農地解放、この三つですね。戦争の背景に、財閥の意見があり、それから、国民を縛っていくものに神道というものがあつた。そして、農地解放の問題、徹底して進駐軍は研究した上で、こういう政策をおこなつた。そして日蓮宗も、敗戦翌年に民主化宗制を表明して、日本国憲法で、帝国憲法ではない裏付けを貫つてずっと過ごしてまいりますが、朝鮮戦争を期に進駐軍の姿勢が変わると、反共政策でまとめよう、日本を方向づけていこうということで、対応が変わります。そういう細かい研究はまた専門的になさればいと思ひますが、問題は宗教法人法、これはいい、戦前の宗教団体法から比べたらよっぽどいい。団体法のこととはまた分科会で挙げてもらいますけれども、それでも問題なしとは言えない。そういうことを、与えられたものとしてではなくて自分のこととして考えていかないと、世法が変われば仏法が変わるということになります。法主国従であるはずの我らの立場が、実際には国主法従、国法のほうが変われば宗教のありようが変わると。典型的なのが、一頁の年表の一番上にあります、社寺領土地令、明治四年。社寺の領地を取り上げた。完全に取り上げたわけではなくて、何割か取り上げている格好ですが、経済基盤をいっぺんに失うわけですね。経済基盤どころか、本堂が建っている所がなくなるわけです。これで縮み上がって、怖がって政府の言うことを聞くようになったわけです。それが今度、農地解放という、進駐軍指令でまたお寺は打撃を受けます。来年三月の国会に上程される予定の公益法人の見直し。その中に、宗教法人の課税問題がある。これは放っておくと、どんどん国のほうから、或いは政治行政のほうから、坊さんのいる場所がなくされる。これに抵抗しないで従属していると、また戦前に戻るのではないかと、私は心配しております。そんな懸念を一番最後に書いておきましたが、その辺のことにつきまして、まず、総括としましては、パ

ネルディスカッションを聞いていただきまして、ご自分の考え方のご参考にしていただいて、皇道仏教行道会、これ申し上げておきますけれども、日蓮宗は、戦前の皇道仏教つまり天皇制に対して協力したのは行道会がやったことだと、臭い物に蓋をするように、或いは責任を押し付けて済ましてしまっている節があります。それでは反省になつていないと思います。宗門全体が皇道仏教であった、さっきの宗報、日蓮宗教報の文章を見ても、宗報自体でああいうことを書いているわけですから。しかも、皇道仏教行道会ができた頃の背景は、宗門重鎮の大勢は、皇道仏教行道会に対して非常に好意的であったと。それは望月日謙管長が、行道会の発行物に讃辞を寄せておるようなこともありますけれども、よく見てください、宗門全体が皇道仏教だったんです。その突出した部分が皇道仏教行道会でした。ただし、やりすぎた面もあると思います。他宗にも、皇道宗教があります、皇道真宗、皇道禅、皇道キリスト教、皇道大本、みんな皇道がつけました。天皇を頭において各宗があると。今では考えられないことではありますが、日蓮宗が唯一違っているのは、坊さんが坊さんを訴えた。細かいことは、この第一分科会の「皇道仏教問題から学ぶ」の中でもやっていたたく予定になっておりますけれども、大きな流れの中で、皇道仏教を強制された中でどう対応するかに違いがあったと、私は思います。それでも、皇道仏教に対して抵抗した人がいて、例えば、皇道仏教を認めるか認めないかの中でも、ご遺文削除に反対した法華宗があります。この問題は、後のパネルの中でも出ると思いますけれども、最低譲れない線として、お曼荼羅の問題と、遺文削除はできないと。これを法難、或いは国家諫暁として、裁判所で堂々と戦つて獄に繋がれた法華宗本門流の坊さんがいました。我が宗には、いませんでした。この辺のことをどう皆さんがお考えいただくか。戦争になつちやったらお終いですから、なる前に、なる恐れがある段階で戦争を止めていかないと、戦争が始まつたらもうがちがちに固まつてしまいますから、今のうちに、色んなことに気を付けて、坊さんが再び銃を持つて戦わされることのないようにしていただきたいと思っております。皇道仏教問題、皇道仏教行道会だけが悪者になつていくことについて、敢えて取り上げていただいて、皇道仏教の全体の問題として、第一分

科会で考えていただく。それから、宗制の問題が大きいです。他宗へ研究調査に行くとは分かりますが、日蓮宗は非常に宗制が近代的で、合理的に出来ております。他宗はもつと旧態依然としております。いいか悪いかは別にして、宗制という、宗教とはちよつと離れた部分の行政的な部分で、宗教全体を、日蓮教団全体を見ていくことがどういうことなのかということが、「宗制から見た戦前戦後の日蓮宗」、という研究項目でございます、第二分科会のほうで研究願って、後でまたご発表願います。それからいわゆる戦争協力ですが、協力させられた、仕方がなかったというお話がありますけれども、そういうことについて、それはそれとして、今から後、戦争のない社会を作れますかという、国家と宗教の関係を、研究していただきます。ここで、何がしかのアピールが出てくればいいなと思っております。以上、雑駁でございますけれども、初心者には分かりにくいかも知れないが、もし分からないと言ったら恥ずかしいことです。どうぞ今からでも、研究していただきまして、世間の目線に立っていただくためにも、世間が今、靖国問題、憲法改変の問題、イラクの問題、色々な問題について発言していることについて、自分がどういう形で発言できるか、よく考えていただきたいと思っております。以上、基調報告として、この後のパネルディスカッション、分科会、明日の全体会議に繋げていきたいと思っております。肝心は、分科会の皆さんのお声が、どれだけ出るか、出していただけるかと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。